合流点

弥彦議会は「けいぞう劇場化」し、4人の議員が盲動

また弥彦村議会が新聞をにぎわした。九月議会最終日の様子を三條新聞は「競輪場改修工事費二、九億円削除　また修正動議、修正案可決」と報じた。

老朽化した施設の改修計画は、十年以上にわたり春に仮設観覧席を作り、競輪が終われば壊すことが繰り返されてきた。

大谷村政で無駄遣いと指摘されたが、無視された過去がある。

改修にあたり観光対策の一環として女性、家族連れなどが気軽に訪れ、競輪のないときにはイベント用のステージを作り、さらには災害時の避難施設として活用できるものにするという。改修資金は基金の取り崩しと収益の一部を充て、借金なし改修のめどが立ったと説明があった。資料によれば小林村長就任三年間で一般会計に一億八千万円繰り入れながら、競輪基金積立が二億三千万円も増えていた。

本多啓三議員は企画書を提出したプラス・ワン・プランニング一級建築士事務所は住宅街にあり、看板もない、会社の実績を把握する必要がある。昨年から動いていた疑いがあるとし、本多隆峰議員は、競輪場施設改修工事の設計管理委託の書類提出期間が短いと指摘していた。

全議員出席の競輪特別委員会では、反村長派の小熊正議員が賛成して競輪場施設改修費を含む補正予算の採決は五人の賛成で可決となった。

議決後に村長が「毎年仮設観覧席を設置するのは無駄だからやめること」と改めて改修目的を説明するとともに、反対議員の疑問解消のため提案者の話を聞くための委員会が後日開かれた。

プラワン一級建築士事務所のT氏は自己紹介で、十年前まで国内三本の指に入るといわれた内装関係の会社に勤め、主な仕事は商業施設の開発。五十五歳で早期退職し、実家を事務所とした。仕事から大きな設備も看板もいらない。主な実績は新潟駅南開発のサポート、ラフォーレ原宿、JRA新潟競馬場の商業ゾーンと一連の企画設計管理、飲食店、介護施設等にもかかわった。今回は『競輪場らしくない競輪場・新しい客層を取り込む』というテーマを頂き、自分の得意分野と語った。

啓三議員は「高い技術と経験」にこだわり、過去に報告された実績から高い技術に疑問と言い放った。計画をいつ知ったか。事務所を登録しているか。協会に入っているかなどや、発言を迷っていると前置きして競輪場に来たか。名刺交換し、複数の職員が同席した。

事前に漏れ、公募前に動いていておかしいなどと、テレビドラマの弁護士が検事をまねた詰問口調に異常さを感じた。

隆峰議員も高い技術と経験は一社では比較できない。貴重な村民の税金を使うのに一社しかなかったというわけにはいかない。仮設の金がムダというのであれば、村長就任時にやめればいかった。固定したものは莫大な費用が必要と主張していた。建築施工管理士の隆峰議員が言う高い技術と経験の基準はどのあたりか聞いてみたい。

T氏は実績は報告義務のあるもののみとし、終始冷静で誠実な紳士然とした対応だった。

この計画は国立競技場が隈研吾一級建築士が設計し、総合プロデューサーとして工事が進行中であるが、プラワン一級建築事務所T氏が弥彦競輪場改修計画の総合プランを作成し、その責任と管理のもと協力会社とこの事業を行うことと同じでないのか。

そもそも予定外の競輪特別委員会は担当者が説明し切れない部分の話を聞くために、T氏のご協力で特別に実現したのでなかったか。百条委員会と違い、何ら権限はない。それなのに、私人に対して詰問調の質問や高い技術を疑い、すべての事業実績と売り上げを尋ねる議員の無節操ぶりにあきれた。違いを知っての発言であれば議員の倫理にもとり、知らなかったのであれば議員の能力に疑問を感じる。

啓三議員に「元副村長経験者が、随意契約と一般競争入札の違いをご存じのはず」との村長発言がすべてを物語っている。さらに聞き方にも礼儀と節度があってしかるべきだ。T氏に失礼だと忠告された場面もあり、同氏の資質を疑わざるをえない。

次に村長に反論権がないと指摘した啓三議員は、大谷良孝村長の腹心として議員に対して圧力で発言を抑制し、ときには無視するなど、公人とは思えない行為で議会を軽んじた張本人であり、反論権を言う資格はない。

本多啓三議員と一部の議員が、議会という公開の場で良識ある発言をしていれば、この問題は提起されなかっただろう。これまでも度重なる一方的主張がまかり通る中で、執行部が反論できない状況下では村民も正しい判断ができない。特に補欠選挙で登場してから議会は【けいぞう劇場】化し、氏に盲動する四人の議員による議会は今や村民を代表する議会とは言えない。

すでに基本条例や規則を定め、または議会との申し合わせで執行部の反論権を認めた自治体が増えている。議会改革の一環として早急に反論権を認め、村民のための政策提言と価値のある活発な議論を切に望む。（傍聴人・七〇歳・男）